

アマダイ通信NO. 100

(Tile fish network letter)

2014年福寿草咲く

知人・友人各位

お陰様で100号。我ながら物好きなことをと思いつつ、20年近く。50才からの「シルバ一起業」の軌跡に重なる。青春の舞台、東大三鷹寮を中心に、多くの友人・知人の助力を得、手助けを必要とする方々から日々の糧を頂き、余命半年の「ステージⅢb」の大腸癌も、術後11年経過。3千通を超えた時点で、メール配信をお願い、半数は切り替えて頂く。物好きをどこまで続けられるか？読者の皆様のご協力をお願いいたします。

◎東大「紛争」45年目の真実

珍しく早く7時半くらいに帰った晩、NHKのクローズアップ現代が始まる。明日は「東大紛争45年目の真実」がテーマだという。「紛争」というのは面白くない、今頃わかる「真実」があるかとも思うが、東大「闘争」は我が青春そのもの。明日は飲み会だし、ビデオもない、残念だと思ったら、居酒屋にテレビがあり、青春の残像を目で追うことに。

本郷の仲間と全国の学友が安田講堂に立て籠り、明日は機動隊との攻防戦だという前夜、安田講堂前から正門までの銀杏並木を埋め尽くす、全国から集った万余の学生を前に、駒場共闘を代表、半ばの希望と半ばの絶望の淵で、全国の学生の連帯と労働者の決起を訴える。安田講堂の内外から機動隊を挟み撃ちだ！籠城する仲間を残し、本郷を後にする。

1日持つばと思った翌早朝からの安田砦の攻防戦は二日間にわたる。お茶の水、神田一帯を制圧、神田カルチェラタンから、ヘルメットとゲバ棒、碎石と火焰ビンで「武装」、安田講堂を目指すも、重装備の機動隊の壁を崩せない。ここを分水嶺として日本最後の革命運動は終息に向かう。青春時代は夢のように過ぎ、思い返せば、甘く、切なく、ほろ苦い。

◎夢敗れても原点に忠実に！

「45年目の真実」は大学側からの話、学生側の資料は、同じ映像を何回も繰返すだけだった。赤地に白のモヒカンヘルメット、後ろ向きで、デモの先頭で指揮していたのが🐟のようにも見えた。数日後の三鷹クラブの講演会の二次会でも、一年下で🐟寮委員会の会計委員をしてくれた中村君が、「🐟さんのおかげで人生を変えた人間が沢山いるんだよな」と、ぽつり。夢敗れてもその原点に忠実であれ！という注文か？

敗戦直後のどん底の貧しさの中で生まれ、育ち、戦後民主主義と平和が社会に浸透、経済が高度成長する過程で自我を形成、柔らかな感性は貧困と格差に憤り、成長する企業の海外再進出に、戦争への臭いを感じた。貧困と格差、戦争のない社会を！階級の廃絶と革命を！学生を組織、街頭へ繰り出すが、経済の高度成長政策の成功で「豊かな社会」が実現、「国民総中流化」と「福祉社会」の出現で、日本最後の「革命運動」は潰える。

90年、東西冷戦体制の終焉で再び資本主義一極体制が出現、市場のグローバル化と技術革新で世界は一変する。新たな枠組での世界経済の再興と競争の激化は、貧困を置き去りにして、格差を拡大、貧困と格差の拡大は世界に不安と不安定、反抗と反乱をもたらす。

◎山は富士、蕎麦は子諸、知事は舛添！

お茶の水で富士そばを食べる。一人ランチは本郷三丁目にある小諸そばか松屋の牛丼が多いが、健康のためにはかき揚げか玉子を食べない方がいいと思いながら、その時の雰囲気がかき揚げ玉子うどん(温)か蕎麦(冷)を食べてしまう。富士そばは塩味がきつい上、かき揚げもつゆも小諸そばが美味しい。値段も小諸そばは 380 円だが、富士そばは 440 円。富士は高い！山は富士、蕎麦は浅間山麓、小諸！？

三鷹寮で 1 年後輩の舛添君が二度目の挑戦で見事、都知事に当選。翌日の集会やデモの意義を熱心に説く寮委員長の。自分は民社党支持だからと、隙間から粉雪舞い込む木造二階建ての寮の勉強部屋で、どてらに身を包み、一心不乱に勉強する舛添君。終に交わることはなかった。それでもそんな三鷹寮に愛着があり、の呼び掛けで三鷹クラブで 2 回講演、一度は寮に出向き、若い寮生のために話してくれた。

半世紀を経て舞台は回り、主役も交替。首相にしたい男として、野党自民党でトップの人気を誇りながら、請われた党首の座を固辞した舛添君。今回は都知事に果敢に挑戦、首都東京の顔になった。これまで以上に多忙を極めるだろうが、三鷹クラブで、そして何よりも若い寮生、学生諸君の前で、もう一度思うところを話して頂ければと思う。

◎近代市民革命と戦後民主主義

「海賊と呼ばれた男」、出光佐三が社員としたマルクス研究のレポートの復刻本、「マルクスが日本に生まれたら」を買う。異端の起業家、名経営者がマルクスをどのように理解していたか？興味深だ。

エネルギーを如何にして確保するか？中国に石炭、南方に石油を求めて兵を進めた日本軍国主義。出光佐三のような経済人も又、国策に沿って軍靴に続き、敗戦で全てを失う。国民は軍国主義を否定、民主主義を受け入れ、人権の尊重と福祉を願い、永久平和を誓う。明治維新と敗戦を経て、近代市民革命が日本でもようやく成就したとも言える。

だが、安倍総理が、東京裁判は「勝者によって作られた歴史」だと公言、A 級戦犯を祀る靖国神社を参拝するのは、憲法の保障する信教の自由、政教分離原則に反するのみならず、ドイツ国民がヒトラーを祀るようなもので、軍国主義とアジア侵略を正当化、民主主義国の共通の出発点たる、近代市民革命の精神をも否定することにならないか？この点で世界の民主主義国の失望をかい、国内の深刻な矛盾・対立から目をそらし国民の統一を図ろうと愛国主義を煽るプーチンや習近平と、同列にならないか？願わくは愛国主義をこれ以上煽り、きな臭い軍拡競争に走らないこと、世界から孤立しないことを！

◎お米と水…美味しいご飯を食べるには

66 年入寮のからすると息子のような 94 年入寮の神戸の久米知之弁護士が、自分の顧問先の、菊太屋という社員 30 人、売上 17 億円ほどの大阪の米屋の顧問に紹介してくれる。拘りのブランド米とお握りを売る店の出店や、販売、ブランド米の集荷を手伝う。

菊太屋の拘りのブランド米に秋田の米が一種しかないので、年末に二度、故郷秋田へ。副知事や高校同級生の県議、能代市長、八峰町長、農協組合長、お百姓さん、農業生産法人、農園主など、色々な方にお会いして頂き、次なる展開も見えて来る。故郷の美味しい米と農業にとって最も大事な販路の提供が、顧問先の売上拡大に貢献、顧問先の売上増が、

故郷の米の拡販につながる。「故郷のために！」という我が青春の思いも満ちた。かつて貧しかった「故郷のために！」という思いからの、🍌のこれまでの故郷での活動は、ボランティア活動でしかなかったが、今回はビジネスとしての貢献でもある点が嬉しい。

1升のお米を炊くと、2升2合のご飯に変身する。だから日本の米を中国の水道水で炊いても美味しいご飯は食べられない。お米より、水を食べることになるからだ。7分つきの米の60%も水だというから、美味しい水で出来た米を美味しい水で炊けば更に美味しい。故郷白神山地のブナの養分を含んだ清らかな水で育つ「白神米」を、白神の水と一緒に売るのが最高だ。菊太屋の店舗で白神の水も一緒に売るか？更には国境を超えて！

◎農家と農協

三鷹の寮の近くの辰先輩宅での新年会、帰省中なので寮生は一年生2人と二年生1人。秋田の地酒を持参する。山の恵みの豊かな美味しい水で育った米を、美味しい水で炊きあげたご飯は旨い！恵まれた環境を武器に外国人にアピール、不味い米を食べている国に、白神の美味しい水と米をセットで食べて貰えないか？ついでに秋田の地酒も。美味しい米も減反政策があり、自由に作れない。自由に作れないので生産規模の拡大が進まず、生産性も上がらない。農家も美味しい、単価の高い米は作ろうとしても、沢山獲れる米を作って収益を上げ、生産コストを下げて海外との競争力をつけようという農家は少ない。

それでも、農家の高齢化、後継者難の結果、やる気のある農家に、少しずつ田んぼが集まり、美味しい米を大規模に作り、コストを下げ、販路も自力で開拓、儲かる米作りを実践している大規模農家も増えている。そんな農家は、農協に出荷すると、苦勞して作った拘りの米も、一般の米と同じに扱われるので納得出来ないと、ITも使い、独自の販路を開拓、農協離れが進む。一方農協も、一農家では投資出来ない大規模サイロを設け、最新の精米システムを導入、品質管理の向上で農家の支持を獲得するのに余念がない。

政府が減反政策を撤廃、農政を転換するというが、主食米の代わりに麦、大豆などの転作奨励金が維持され、飼料用米や製菓・製パンなど用の米粉用米など、非主食米に転作した際の補助金は増額するという。結局、主食米の減反は維持され、兼業農家の離農も進まず、大規模農家の生産拡大・効率化を阻害するだけでなく、消費者には補助金という財政負担(税金)と高い米を買わせる家計負担という二重の負担を負わせることにならないか？

◎Zに乗り、クルーザーを操る若者のつくる秋田こまち

秋田米の買い付けの夜、八峰町のハタハタ館に泊まる。夕食は7時までというのを、加藤町長の計らいで延ばしてもらった「門限」の8時直前着。日本海の幸を肴に、町長差し入れの地酒白瀑の大吟醸を味わい、爆睡。秋田名物ハタハタ漁の季節、何十年振りかでハタハタ漁を見れる筈が、雪国秋田は雨。海も凪いでいる。生まれ育った集落の岩館漁港まで足を運ぶが、荒波に小舟を浮かべての勇壮なハタハタ漁を、遠来の客人に見せられず。

津軽と秋田の国境まで車を走らせ、ヨーロッパの涯、ポルトガルのロカ岬に勝るとも劣らぬ雄大な景色を楽しんで貰う。客人曰く、遙か水平線を見晴かすと、地球の丸いのがよくわかると。断崖絶壁から海に雪崩込む、淡く雪化粧した白神山地と遙かに小波打つ日本海。海と山の間、岸边を洗う白浪と国道101号線、更にその上段を五能線の鉄道の、3本の曲線が平行して走る。久しぶり我が家にも顔を出し、客人にもお茶して頂く。

温泉は朝飯前に楽しみ、役場で加藤町長に真瀬ファームを紹介してもらおう。JA あきた白神で最新のカントリーエレベーターと精米システムを見学。料亭都亭で、これも秋田名物、美味しいキリタンポ鍋をご馳走になる。斉藤能代市長には市内のこだわりの米農家を紹介して貰う。お粥の缶詰を作る業者がいるという市長の話に、米屋がつくるお粥をデパートで売りたいと菊太屋の若社長。収穫の多い旅だったが、50町歩の田圃を耕す東雲農園の20代?の若社長が赤いフェアレディZに乗り、クルーザーを操るというのも驚き。大規模営農で儲かる農業が出来れば農家も若返るということを実感。赤いZに乗り、クルーザーを操る若者のつくる秋田こまちが、有名デパートの地下で飛ぶように売れると嬉しい。

◎新潟で冬季オリンピックを!?

正月休み、娘家族と越後湯沢へ。30日のガーラ湯沢、8人乗りで次々来るゴンドラとリフト2本を乗り継ぎ山頂へ。1200mの山頂から、青い空と雪化粧した山波を背景に、主を忘れたボードがすごい勢いで一人旅。リフトの隣人曰く、10年ほど前に舞子高原のスキー場で暴走ボードが三歳の子の頭を直撃、死なせた。トイレ休憩と搬器に乗っている時間を除き、携帯便利な130センチのショートスキーはフル稼働。2キロ半のロング下山コースを3回も滑降、尻餅もつかせず。その上、シルバー半日券でリフト16回分も滑り降り、よく働く。閉鎖していることの多い、サウスエリアの未圧雪最上級コースへの、山頂のゲートが開いている。短いからコブでも滑り易いよ!とショートスキーがささやく。未走の難所に身を踊らせる。スキーシーズン前半でコブとコブのギャップは思ったほど酷くなく、どうにか滑り切る。これで広いGALAを全山制覇と見上げると、ブナの若木の芽を一心に食む一頭のカモシカ。宿に帰って孫娘とプールで遊ぶ。

翌日は孫娘と岩原のキッズパークで橇遊び、午後湯沢高原へ。20分に一本の108人乗りの巨大ゴンドラでゲレンデへ。更にリフト2本乗り継ぎ山頂へ。吹雪の山頂から格好良く一気に麓まで滑降の筈が、厚く降り積もる新雪に、ストックなしで身振り、手振りでのバランスを取るショートスキーでは、圧雪のゲレンデと勝手が違う。まだまだ未熟な技では足元がふらつき、思うように滑降出来ず、時に尻餅。いつもなら醍醐味の、狭くて長い下山コースを必死の思いでようやく麓へ、を繰り返す。

岩原とガーラ、湯沢高原と、越後湯沢のメインの3ゲレンデを滑るが、リフトも標高も一番高いガーラが、コースも広く、長くて多彩、新しく作った2キロ半の長い下山コースも、狭い林道を降りる湯沢高原より気分良く滑れる。8人乗りの小さな籠を数珠繋ぎで運転するゴンドラも、待たずに乗れるので便利。吹雪いて視界が悪くなるとライトでゲレンデを照明するので滑り易い。ガーラではルーマニア人のビジネスマン2人と、湯沢高原ではメキシコからのカップルと、片言の英語で話したが、アジアを中心に外国人客も確実に増えている。東京から一時間ちょっとの新幹線でゲレンデ直行、コースも多彩。旨い日本酒と温泉で疲れを癒し、加えて夏は登山やハイキング、ゴルフやラフティングも楽しめる。上越だけでなく、通年で楽しめるリゾート日本を世界にアピールしたい。安全・安心、美味しくて、温泉で暖まる新潟冬季オリンピックをそのテコにするのは如何なものか?

アマダイのジャカルタ紀行(2012年6月22日~25日、JTB旅物語) II

④豊かな自然の恵みが人を怠惰にする！？

田舎道をさらに進むと、切り株の残ったままの水田や青々とした田圃が連なる。常夏の国だから稲も時期を選ばず一年に何回も穂をつける。水量豊かな川は濁るが、ジャカルタのようなごみの川ではない。南国の桜、紫の花をつけるジャカラランダの木はこの地にはなく、純白の大きな美しい花をつける木をみつけ、その名をたずねるとカンボジア!?だという。原産地がカンボジアなのだろうか？

やがて道の両脇にはマレーシアで見たのと同じように、整然とゴムの木が並ぶ。所々に大きな工場が現れるのはゴムの加工場か？ゴムの木の寿命は二十年、老木を切り倒した赤土に苗を植え、若木の間にはサツマイモのような芋が蔓を這わせる。ゴムの木が成長し、芋の葉が光合成でデンプンを蓄えることが出来なくなるまで、芋はインドネシアの人々のお腹を満たす。ボルネオで見たパーム油を搾るパーム椰子畑は見ない。石油と石炭という化石エネルギーや銅、ボーキサイト、ニッケル等の鉱物資源が豊富なインドネシアだが、常夏の太陽の輝きも植物に米やデンプン、ゴムやパーム油、丁子や白檀等の香料や木材等の価値ある物を作らせる。暑い陽射しは海の水を温め、水蒸気は上昇して雲となり、雲は雨に変わって大地に降り注ぎ、植物が光合成に必要とする水を豊富に供給、光合成が人間に必要な物を効率よく作り出す。大地と太陽と海が有り余る物を民に与えるインドネシア。だから現地ガイドが嘆くようにインドネシア人は怠け者になったのか？だからポルトガルやオランダ、日本によって侵され、辱められたのか？

ゴム園が尽きると山の頂上まで見渡す限りきれいな茶畑。茶摘み女が手で摘む。機械はほとんど見かけない。人手も有り余るほど豊かで、広場だけでなく道端でも露店や屋台が所狭しと店を広げ、なけなしの金を稼ごうと必死だ。駐車場では出入口の機械の代わりに人間が料金を徴収、道に出て車を止め、誘導する。だから!?道路に信号機がない。ガイドのテイさんを、インドネシア人は必死に金を稼ごうとするじゃないかと揶揄すると、自分の姉は働こうとしないし、弟は新しい仕事をみつけても2、3日で辞めると容赦ない。

⑤強者どもの夢の跡

広大なチチアトルの温泉公園の中には温水の川があり、バンドゥン市民の週末の憩いのスポットとして人気がある。土曜日だったので家族連れで大にぎわい。☁も靴を脱いで足湯する。滝で服を着たまま打たせ湯を楽しむ者や、お湯の流れ込む露天風呂や野外の温水プールで短パンとTシャツでお湯に浸かる少数の大人の男と子供達を物珍しそうに眺め、持参の弁当を広げたり、お喋りを楽しむ客がほとんどだ。日本の温泉と違って裸で湯浴みする者はいない。夫以外の異性に肌を見せないというイスラムの戒律が影響しているのだろうか？旅行案内もろくすっぽ読まず、海水パンツを持参しなかったのを反省する。

更に山道を上り、タンクバン・プラフ山の噴火口へ。エメラルド色の美しい湖水がある訳ではないが、灰色の釜から噴煙が上がり硫黄の匂いが漂う。釜の縁で心地よい涼風を楽しむ人でごった返す。予約していた中腹のレストランは昼からカラオケの客に先を越され、離れのあずま屋の板敷に案内される。ここまでカラオケが普及している！と驚くが、本家の日本はカラオケで世界でどれだけ稼げているかと思う。バンドン料理は野菜中心で余り辛くない。ビールを頼むがいない。近くで買えるからと、買いに走らせる。ビールがないのはイスラムの客が多く、頼む客がいないからか？中瓶1本3万5千ルピア(350円)。

バンドゥンに向かう途中、一山丸ごと各種園芸作物が植えられた山がある。かなりの傾斜なのでよく出来るなど感心。同時に、ホテルやレストランと契約するなど、販路を確保しなければ大規模栽培は難しいだろうと思うが、高原の避暑地に向かう週末の信号もない一本道にはレストランやホテルが林立、大渋滞。所構わずゴミが散らばっている。バンドゥンはオランダとの独立戦争を勝ち抜いた建国の父、初代大統領スカルノが1960年代に世界の第三勢力のリーダーとして活躍、非同盟諸国会議を開いた場所だ。マルキストとして「世界革命」を如何にして実現するか考える若き●●は、「世界の農村が世界の都市を包囲する」という毛沢東の世界革命戦略を是として、アジア、アフリカを中心とする第三勢力の躍進に熱い想いを馳せたものだ。

⑥インフラは未整備でも、南国の爽やかな風

バンドゥンでガソリンスタンドに寄って高速に乗り、ジャカルタに帰る。十時間の予定が、渋滞もあり朝7時から夜10時までの15時間のオプションツアーとなる。日本では見かけなくなった高速道路の路肩走行をよく見る。レギュラーガソリンと軽油は45円、プレミアムガソリンは100円。日本より大分安いレギュラーガソリン・軽油とハイオクの差が大幅なのはレギュラーと軽油に出ている燃油補助金が大いからか。石油も石炭も産出する資源国だが、夜の街は暗い。ビルや看板は勿論、街路も暗い。国民の不満を抑えるため電気料金が低く抑えられ、電力会社が設備投資に金を回さず、電力が不足するのか？

バス停も暗い。一般のバスや東南アジアではどこでも見られるワゴンタイプの乗り合いバスの他に、渋滞を尻目に高速で頻繁に走るエアコンバス。片側3~4車線の幹線の1車線がトランスジャカルタ専用レーンだ。歩道橋で道の両側とつながれた分離帯に、行き先別の乗り口がある屋根付きの大きなバス停。レールを敷き、架線して電車を走らせれば、大量輸送が可能になり、渋滞緩和が期待出来そうだ。夜遅くまで多くの男女の客がバス停で待っている。治安はそんなに悪くないのかと思うが、案内されたショッピングセンターの駐車場の料金所の集金人はサバイバルナイフを持っていたと同行者。「市バスやバス停に近づかないことが危険回避の第一歩」と「地球の歩き方」。

3日目はジャカルタから南へ60キロ、オランダ植民地時代から栄えた高原の避暑地ポゴウルへ。ジャカルタ郊外のタマンサファリとポゴウル植物園の見学。順調に走っていた高速道路が出口で大渋滞。渋滞が始まると物売りだけでなく、ヘルメットを被ったバイクタクシーの運転手が出て来て、乗り換えないと営業を始める。一般道と高速道路の出口が合流する先の道路の拡幅が未完成で、時間で片側の道を閉鎖、全く動かない。痺れを切らして無理やり渋滞を抜け出しUターンする車もいる。1時間近く待つようやく動く。

サファリはアフリカのそれとは似ても似つかぬもので、動物園との中間だ。キリンやシマウマ、カバやサイの他にライオンや熊、ワニなどの猛獣がアフリカのサファリのように探す苦勞もいらず、身近に見られる。広い自然の密林の中で飼っているが、よく見ると電流線を張った柵や堀で安全に区画された場所で飼っている。専用の四駆に乗り換え、時に土埃を巻き上げ、広いサバンナを移動する動物を求め疾駆するアフリカのサファリと違い、動物の間を自分の車でゆっくり巡る。アフリカのような野生の迫力、スリルには欠ける。

サファリの近くの田舎のレストランで昼食。南国の陽射しはきつい、木陰や室内は爽やかな風が吹き、エアコンも扇風機もなくても、暑さは気にならない。店から取り寄せの

緑のラベルの、毎回同じ地ビールを飲んでボゴウル植物園へ。世界中から1万5千種類もの植物を集めた87ヘクタールの園の半分を徒歩見学。世界最大の花、ラフレシアにはお目にかかれず。渋滞を気にして、後ろ髪を引かれる想いでジャカルタ空港へ直行。短くも慌ただしい旅物語は終わる。(完)

◎裁判・弁護とひと・ともに世界を領つ

東大三鷹クラブ第113回定例懇談会（大阪開催）のご案内

第113回定例会は、弁護士の石川元也さん（昭和25年入寮）に「裁判・弁護とひとともに世界を領つ」と題し、お話ししていただきます。

石川さんは、旧制松本高校1年修了後、昭和25年、文科I類に入学、開設されたばかりの三鷹寮に入りましたが、6ヶ月程で駒場に移られたので、翌年入寮の私が御一緒する機会はありませんでした。初めて石川さんにお目にかかったのは、同じく25年入寮の鎌倉節さんの警視総監就任を祝う会です。石川さん達同室の方々による釜喰会の呼びかけで開かれた会合で、20人程の寮友が集まりました。その時は、各人の近況報告から、石川さんが大阪で弁護士を開業していることを知った程度でした。

三鷹クラブによる大阪の定例会に石川さんが出席されるようになり、時折会話を重ねるうちに、今回の講師をお願いする運びとなりました。私自身の不明を恥じるばかりですが、講師を引受けられた後で送って下さった著書により、石川さんが、多くの重要な刑事・労働事件の弁護に携わり、素晴らしい実績を挙げておられた方であることを知った次第です。石川さんはまた、日弁連でも数々の要職を務め上げるとともに、自由法曹団に所属され、幹事長、団長を歴任されました。今回お話いただくのは、石川さんが在職された57年の弁護士活動の中で、思い出深い3つのケースを中心に、それにかかわった人々との共通の世界についてです。

戦後の3大騒擾事件の1つとなった吹田事件には、弁護士開業直後に参加され、長期にわたる裁判の過程で、副主任、最後には主任弁護人として40人余の弁護団を束ね、無罪判決を得ました。千日前デパート火災の遺族による損害賠償請求民事事件では、弁護団長として、原告のために和解金額の積み上げに努め、難しい1人1人への配分にも御苦労されました。また、同和行政にかかる多くの事件では、関係団体の圧力に屈することなく、確固たる信念のもとに弁護団の責任者として法廷に臨み、公正な判決に導きました。その他にも、石川さんは、いくつかの事件の中で、新判例をきりひらいた経験もあり、それらについても御紹介いただけたと思います。

演題のサブタイトル「ともに世界を領つ」は、石川さんが最も尊敬されている大阪の先達、故毛利與一弁護士の言葉で、石川さんの弁護活動のバックボーンを形成する理念です。弁護士と裁判官とが世界を共にし、共通の認識を感得することで、はじめて適正な判決を得られるものであり、さらには、裁判に関係するすべてのひとびと、被告人や検察官などを含め、同じ世界を共有することにまで発展する考え方です。3月の定例会のお話を期待しています。(平賀記)

日時：平成26年3月19日（水） 18時30分～21時（開場 18時）

場所：中央電気倶楽部 本館207号室（大阪市北区堂島浜2-1-25 電話 06-6345-6351）

会費：5000円（会場費、夕食代・飲み物代、通信費など込み）

申込先：平賀・干場 FAX 03-5689-8192 TEL 03-5689-8182

（有）ティエフネットワーク Email：tfn-hoshiba@blue.ocn.ne.jp

◎勝部邸で今年もクリスマスパーティ

暮の25日、寮で2年下の勝部君の原宿のオフィス兼自宅で、10年から13年度入寮の、若者14人と、今年もクリスマスパーティ。学年を越えて交流する。参加者は石田 翔太郎（2010・理Ⅰ・尾道北）、大槻 美貴（2010・文Ⅰ→法・仙台育英）、星川 昂平（2010・理Ⅱ→薬・秋田）、柳沼 和也（2010・理Ⅰ・郡山）、楊 楊（伊藤 拓也）（2010・理Ⅱ・清教学園）、兼子 健太郎（2011・理Ⅰ・下関西）、濱屋 和広（2011・文Ⅱ・富士）、和田 崇史（2011・理Ⅰ・東邦大東邦）、野原 裕一郎（2012・文Ⅱ・甲陽）、庄司 惟（2012・理Ⅰ・聖ウルスラ英智）、稲川 秀征（2012・理Ⅱ・刈谷）、佐々木 一（2012・理Ⅰ・佐賀西）、伊藤 大祥（2013・理Ⅰ・西大和学園）、箱崎 鉄美（2013・文Ⅲ・文徳）

◎タフな東大生づくり

11年入寮で工学部システム創成工学科3年の兼子健太郎君とチーム匠の仲間二人を、ニュースにならないかと、入寮同期のNHK小野副会長（当時）に紹介。全学的な授業の一環で、トヨタと日産が応援する、海外のヒストリックカーラリーに参戦するプロジェクト。トヨタプリンタートレTE27（1973年）と日産バイオレットPA11（1979年）という、クラシックカーほど古くないが、今は走っていない車を作り直し、「Winter challenge to Monte Carlo」と「Rally ede Paris 2014」に参戦する。「モノづくりと国際化教育の融合」を目指す授業の4期目。車の修理、スポンサーとの交渉、スケジューリングから大会選択、エントリーまで全て学生が行う。総長の浜田君が唱える「タフな東大生」づくりの一環だ。

かつて自治寮だった三鷹寮。選挙で寮委員長を選び、委員会を作って、入退寮権も行使、職員を雇って寮食堂を運営、風呂や売店も管理、寮祭などでは奉賀帳を回して地域の協力も得、学習・生活環境向上のために大学とも交渉、時に隊列を組んで街頭にも飛び出し、社会に異議申立て。24時間生活を共にする中で強固な絆を築き、人間的な成長を図った。18、19の若者がそこまですることで、三鷹の地で「タフな東大生」が創られていった。

単なるアパートと化したかに見える現在の「東大三鷹国際学生宿舎」でも、大学が「管理放棄」する中で、「自治委員会」が創られ、「自治の学校」としての「寮」の萌芽が見られる。自治権を与えられるのではなく、奪い取ることが出来るか？「宿舎」を「寮」に近づけられないか？自治寮としての三鷹寮廃寮の契機となった東大闘争最中の寮委員長だった。自治委員をした若き兼子君と、寮同期の小野副会長をつなげることで、「逞しい東大生」づくり、次代の日本を担う人材づくりに多少とも貢献出来ればと思う。

◎我は海の子、山の子、雪の子、白神の子（結びに代えて）

気象庁とNHKの「指導」に逆らい、2月8日（土）、大雪をものともせず、奥利根の宝台樹でスキー。車で日帰りの積りが、新幹線で朝帰り（雪の子）。隔週くらいには埼玉の小川カントリーで、二組ほどでゴルフ（山の子）。スキーもゴルフもない休日は、中央区の月島スポーツセンターで千メートル泳ぐ（海の子）。同行の仲間を求めています。再見！